

■平忠常 武将・豪族。平将門の孫で、坂東平氏抗争のなか、源頼信に臣従、乱を起こして討伐されるも、房総平氏の祖に。

たいらのただつね

源高明左大臣 967＝ この頃、平良文の子陸奥平忠頼の子に生まれる。父方の従父でもあり、同時に母方の祖父は平将門。

安和の変 969＝ 2歳：

将門の乱を鎮圧した側の平貞盛(国香の子)は、軍功が認められて中央に出仕、弟の繁盛は常陸の地に残り、常陸大掾の祖として、上総・下総に勢力を築く間、やはり、将門と戦い、その死の第一報をもたらした祖父平良文は、武蔵国村岡に土着して村岡五郎と称して、下総国相馬郡の大半を所領とし、父忠頼も関東で有力な武士として名を馳せるなど、坂東では、貞盛流と良文流が平氏内部で敵対関係になっていく。

976＝ 9歳：

往生要集 985＝18歳：

987＝20歳：平繁盛が延暦寺に金泥般若経600巻を奉納しようとしたところ、父陸奥平忠頼とその弟忠光が妨害、

祖父と父の地盤を引き継ぎ、常陸国、上総国、下総に広大な所領を有し、上総介、武蔵押領使に任官されている(これらの官に任官はされず自称という説もある)。諸系図では下総千葉郡にて千葉四郎と称し、京に上って藤原教通(藤原道長の次男)に仕えていた形跡もあるなど、強大な武力を背景に傍若無人に振る舞い、国司の命に従わず租税も納めなかったという。

994＝27歳：

花山法皇事件 996＝29歳：

1003＝36歳：

常陸の豪族平惟基(繁盛の子)と利権をめぐる抗争しており、

源氏物語始 1008＝41歳：この頃、惟基の三千騎の軍勢の援助を受けた常陸介源頼信(満仲の子で河内源氏の祖)の鎮圧に服し、名簿を提出して臣従することを誓約した。

和漢朗詠集 1012＝45歳：

後一条天皇 1016＝49歳：惟基のことを'惟基ハ先祖ノ敵也'と述べている。

1021＝54歳：

藤原道長没 1027＝60歳：

平忠常の乱始1028＝61歳：*安房国の国府を襲い、国守平維忠を焼き殺す事件を起こした。官物収納をめぐる争いが高じたものと思われる。朝廷から派遣された追討使平直方は、貞盛流と良文流の対立を利用しようするも、頑強に抵抗、乱は房総三カ国に広まり、合戦の被害と官軍による強引な徴発により大いに疲弊、討伐に失敗(平忠常の乱)。

平忠常追討 1030＝63歳：平直方は解任され、替わって、甲斐守源頼信が追討使に任じられた。長期にわたる合戦で疲弊しきっており、頼信の家人であったことから、

平忠常の乱終1031＝64歳：*出家して常安と称し、子2人と従者をつれて頼信のもとへ出頭し降伏、京へ連行される途上、病没した。頼信は、忠常の首もって入京、武人としての名声を高めることになる。後に首は親族へ返され、子の常将と常近も罪を許され、所領も没収されず、子孫は房総半島の有力武士として残り、頼信に臣従していたことから、後に、頼朝挙兵の際に、主力部隊となり、鎌倉幕府の御家人となる上総氏、千葉氏が出るのである。また、対立していた直方の娘と頼信の子頼義が結婚、直方から頼義に、鎌倉の地が譲られることになり、結果として、源氏による武家政権への道を開いたのである。なお、上総介を継いだ藤原辰重の報告によれば、平忠常の乱によって、上総国は追討のため3年分の官物を徴発し、2万3千町あった本田はわずか18町に減じる、将門の乱を上回る被害、自ら着任後、千二百町余まで回復したという。